

谷桃子バレエ団 望月則彦・演出振付『レ・ミゼラブル』 撮影:羽田哲也

[バレエ]

「ウィズ・コロナ」、 そしてウクライナへの想い

うらわ まこと

「ウィズ・コロナ」、中小団体への打撃は大

2022年、日本はコロナ禍3年目に入った。3年目にもなると、情報も集まり、ワクチン接種者や感染による抵抗力をもつものも増え、重症化率も減少してきた。したがって、年の後半になると公的な厳しい自粛の指示は消え、夏期には過去最高の感染者数を記録したものの、全体として「ウィズ・コロナ」の意識が強まってきた。

この動きのなかで、社会全体としてもそうだが、バレエなど舞台芸術にとってもっとも好影響があったのは、濃厚接触者、そして待機期間の扱いが緩和されたことである。これにより、年末には累積感染者数が全国で2900万人を超え、バレエ界でもコロナにかかるものは珍しくなくなったが、それで公演が中止になるということはほとんどなくなった。

そのため、とくに都市圏では公演数ではコロナ前に近くなっている。そのなかで年の後半の公演に際しての感染対策は、つぎのような状況であった。まず観客の氏名・住所の登録については不要とするところが増えてきた。一方体温チェック、手指の消毒、さらにマスクの着用はほぼすべてで実施し、また終演後の分散退場も行っているところは多い。

ただし、緩和といっても、コロナ前にはなかった対策のための経費や人員体制が必要なため、中小の団体では負担は大きく、それまでの2年を超える厳しい行動制限により、生徒の減少などで体力を失ったところは回復が遅れている。さらに、従来の文化庁などの助成に加えて、AFF(Arts for the future!) 2など、公的な補助、補填が受けやすいところに比して、それが難しい中堅以下はより打撃が大きく、発表会など活動に苦しんでいるところは多い。

ウクライナのために動いた日本バレエ界

次に、本年の大きな事件として2月末に始まったロシアによるウクライナ侵攻がある。20世紀にはウクライナもソ連の一部で、キエフ(現キーウ)・バレエもソ連のバレエ団として日本でも人気が高かった。さらに、多くのロシアの、そしてウクライナのダンサーがゲストとして、また、日本を活動の場とするために来日し、現に滞在している。ロシアのバレエ学校で学んだ日本人ダンサーも多い。ウクライナではキエフだけでなく、ドネツクのバレエ人との交流も活発であった。数多い在日のロシア、ウクライナの舞踊家たちは複雑な気持ちをもっているであろうが、現実にはとくに変わらず活動を続けている。

この点に関して、わが国のバレエ団はどうであったろうか。

これまでロシアもウクライナもとくに区別せずに交流してきた日本のバレエ人にとって、ロシアの侵攻、ウクライナの防戦、それによる被害は、大きな衝撃であり、また困惑のもとでもあった。しかし、ウクライナの男性ダンサーが戦いに参加し(戦死したものもいると伝えられている)、女性ダンサーは戦火に追われ、避難を余儀なくされている実態を知って、日本国内でも彼、彼女らを救い、勇気づけようとする動きがでてきた。

その方法はさまざまだが、一部を紹介しておく。まずチャリティーである。現在は演劇の世界で活躍しているが、牧阿佐美バレヱ団のプリンシパルとしてウクライナのバレエ団にゲスト出演した経験も多い草刈民代。彼女が芸術監督として、国内外で活躍する日本人のトップダンサーを多数集めて、「キエフ・バレエ支援チャリティー BALLET GALA in TOKYO」を開催した。また、日本に避難してきたダンサーの受け入れ、援助、あるいは連帯の動きもある。たとえば、親交のあったウクライナの女性ダンサーが避難してきたのを機に、ウクライナ支援のチャリティー公演に出演を依頼、観客に現地の生々しい状況を語ってもらった岡本るみ子、そして大阪では針山愛美がプロデュースする「One Heart 2022」など、各

地でこのような活動が行われている。

もう1つが、戦火のもと、活動が制限されているウクライナのバレエ団の日本公演の実現である。前記したキエフ・バレエ団(ウクライナ歌劇場バレエ団)は、京都出身で長らくここで踊ってきた寺田宜弘の努力により日本公演が実現。出国できたウクライナのダンサーを主体に「キエフ・バレエ・ガラ2022」として7月から8月にかけて全国で多くの公演を実施した。この時副芸術監督だった寺田は、日本でも親しまれているエレーナ・フィリピエワを継いで12月に芸術監督となった。このバレエ団はウクライナ国立バレエという名称で年末にも再び来日、『ドン・キホーテ』全幕公演を行っている。



「キエフ・バレエ・ガラ2022」 撮影:瀬戸秀美 写真提供:光藍社

本年強まった傾向

次に、日本全体のバレエシーンを概括する。まず、個々の団体、個々の舞踊家の努力もあって、先に述べたように、やや跛行的であるがじょじょにコロナ前の状況に戻りつつある。

日本のバレエ界の特性の1つとして、バレエ団、そしてバレエ公演が首都圏、関西圏、そして中部地区、とくに圧倒的に東京に集中していることは、この欄でこれまでも再三述べているが、コロナ禍によってそれがさらに強まっている。また、大都市圏以外の地域でも、コロナ禍の影響の受け方によって、団体の体力に格差が生まれつつある。

このようななか、とくに本年、これまでの傾向が強まって明確化してきた現象がある。

1つは、いわゆるバレエ・コンサートやガラ公演、つまり少人数でのソロやパ・ド・ドゥ、また小品をならべた公演が増えていること。トップダンサーを集めたフェスティバル形式のものは前からあったが、さらにいろいろな内容のものが増加している。この理由の1つは、海外のバレエ団の全幕公演がコロナのためにむずかしくなり、そのかわりに主要なダンサーだけが来日し、それぞれが小品を踊るというケースが見られたこと。また海外で名をなした日本人ダンサーが増えたため、オフの時期に彼らやその相手役を集めてプロデュースする公演が東京だけでなく全国各地に広がってきたことがある。

こうなると、主旨や全体の演出が重要になる。上記のウクライナ関連もその1つだし、わが国のバレエ公演の指揮者の立場を確立し、バレエ界に貢献してきた福田一雄の卒寿(90歳)を記念して、関係の深いバレエ団が集まったスペシャル・ガラ「バレエの情景」も注目された。また、現役ダンサー京當侑一籠がプロデュースした、日本在住の若手ダンサーのみを集めた「バレエ・エスポワール」も、映像を巧みに利用して記憶に残る。

次に物故舞踊家の振付作品上演の問題。これも日本に少ないものの1つ。今年は名古屋の塚本洋子のテアトル・ド・バレエカンパニーが独特の香りをもつ深川秀夫版の『ドン・キホーテ』、谷桃子バレエ団がここの芸術監督だった望月則彦の演出・振付の『レ・ミゼラブル』、そして昨年亡くなった牧阿佐美の遺作『飛鳥 ASUKA』が牧阿佐美バレエ団で復



テアトル・ド・バレエカンパニー 深川秀夫版『ドン・キホーテ』 撮影:岡村昌夫(テス大阪)

元上演された。さらに現代的バレエとして注目された矢上恵子の作品も、大阪のKバレエスタジオが昨年に引き続き上演している。ただ、これらはみな作品の上演経験のあるところで、これからはもっと広く、一定の条件でどこでも上演できるようなシステムと意識が強まることが望ましい。



牧阿佐美バレス団『飛鳥 ASUKA 撮影: 鹿摩降司

また、劇場が老朽化や耐震対策のために改修・建て替えが必要なケースも全国的に増えており、今年は多くの公演やコンクールの会場として長年親しまれてきた東京のメルパルクホール (郵便貯金会館)が閉館。劇場をもたない多くのバレエ団にとって会場の確保がますます重要になった。

公演の映像配信がいろいろな形で増加してきたのも、コロナの影響の1つである。ただ、 これが今後定着するかどうかには時を待ちたい。

とくに活発だった東京バレエ団、再出発の牧阿佐美バレエ団

以下、個々のカンパニーの状況を概観、印象的なものを取り上げる。

吉田都芸術監督3年目、開場25年目の新国立劇場では、その記念公演として2022/23シーズンの冒頭に、吉田都の演出による『ジゼル』を新制作・初演した。この作品はオーソドックスで緻密な構成・演出、美術も豪華で国立劇場にふさわしいものであった。ここは観客動員も順調で、古典、現代作品など全体の公演回数を増やそうとしているが、そのためには体制のいっそうの強化が



新国立劇場開場25周年記念公演 新国立劇場バレエ団 『ジゼル』 (新制作) 撮影: 鹿摩隆司

必要なように思われる。

コロナ禍のなかでもとくに活発だったのは東京バレエ団、スケールの大きさでわが国バレリーナのイメージを変えたといわれる上野水香が、古典作品の最後の出演として『白鳥の湖』、『ドン・キホーテ』、『ラ・バヤデール』を踊り、衰えない魅力を示した。ほかに、ジョン・クランコ振付『ロミオとジュリエット』の新制作・初演、ベジャール作品レパートリー化40年を記念する『ベジャール・ガラ』など。

熊川哲也のKバレエカンパニーは、彼の振付作品『カルメン』、『クレオパトラ』を新キャストで再演、さらに新しいダンス作品の創作シリーズ「K-BALLET Opto〈プティ・コレクション〉」として森優貴振付など3作品を上演している。

昨年主宰者を亡くした牧阿佐美バレエ団は上記した『飛鳥 ASUKA』やローラン・プティの『ノートルダム・ド・パリ』などで、新たな出発の姿をみせた。松山バレエ団は70歳代半ばになる森下洋子が依然として全幕作品のすべてに主演、繁異的な存在感をみせている。

川口ゆり子がこれが最後となる『タチヤーナ』を踊り、感動を与えたバレエシャンブルウエスト。創立50年の小林紀子バレエ・シアター、さらに上記した谷桃子バレエ団、井上バレエ団、東京シティ・バレエ団、スターダンサーズ・バレエ団、NBAバレエ団なども新演出、新制作を含めて活発に活動している。

さらに、このところ注目されているのは佐々木三夏がプロデュースする大和シティー・バレ



226

エ。広く振付家を起用した創作シリーズとともに、宝満直也の『シンデレラ』を現代のアパレル業界に置き換えた『ガラスの靴』を発表、話題となった。

全国の統括団体日本バレエ協会は、リモートによる振付指導を主体にユーリ・ブルラーカ版『ラ・エスメラルダ』を3月に日本初演した。このリモート方式はコロナ対策として他でも行われている。



地主薫バレエ団『シンデレラ』 撮影: 尾鼻葵 (Office Obana)

関西·中部地区ではとくに貞松·浜田バレエ団

関西圏、中部地区も、少しずつコロナ前の状況に戻りつつある。そのなかでとくに注目されるのは、兵庫県神戸市の貞松・浜田バレエ団。この一年も古典全幕『コッペリア』、「創作リサイタル」、「バレエ・リュスの世界」、そして長年大人気の自前の『くるみ割り人形』に代えてその現代版を外部の若手振付者に依頼するなど、極めて積極的だ。設立5年目のバレエカンパニーウエストジャパンも地位を固めつつある。

大阪では地主薫バレエ団が昨年に引き続き、若手中心とベストメンバーによる2つの全幕ものを同日に連続上演。本年はアイディアに富んだ『シンデレラ』と、小野絢子とここの出身

228

の奥村康祐の新国立劇場バレエ団コンビで『ジゼル』を上演している。古い歴史をもつ法村友井バレエ団も、篠原聖一に『クレオパトラ』を振付依頼するなど、着実に活動している。 野間、北山大西、カンパニーでこぼこ、佐々木美智子らの団体もコロナに対応しつつ活動を続けている。

京都府では、文化庁の移転(2023年3月完了予定)が進んでいるが、バレエ界はややコロナからの回復が遅れており、そのなかで有馬龍子記念京都バレエ団が『ロミオとジュリエット』などで存在を示している。

名古屋地区では、越智実、松岡伶子の2大バレエ団は今年は定例公演のみで大作の上演はなかったが、岡田純奈バレエ団、川口節子バレエ団は例年どおりの活動をみせた。さらに上記したテアトル・ド・バレエカンパニーは40周年記念として、深川版作品公演と併せて、古典と創作で『オータム・バレエガラコンサート』を開催した。

沖縄の緑間玲貴主宰の団体トコイリヤが、沖縄の伝統をとりいれた作品を2月に那覇 文化芸術劇場で上演したあと、昨年に引き続き東京で春と秋に公演したのも注目される。

海外からの来日も年の前半は本格的にはなかなかむずかしく、シュツットガルト・バレエが3月に、7月には英国ロイヤル・バレエがそれぞれトップダンサーだけ来日してガラ形式で、秋以降は状況がやや好転し、ヒューストン・バレエが『白鳥の湖』、モンテカルロ・バレエ団が『じゃじゃ馬馴らし』、そして前述のウクライナ国立(旧キエフ)バレエが全幕公演を行っている。

全国各地のバレエコンクールも、コロナ禍のもと、表彰式を中止したり簡素化したりしなが ら、じょじょに活発さをとり戻している。

うらわ・まこと

本名・市川彰。元・松陰大学経営文化学部教授。元・公益社団法人全国国立文化施設協会舞踊アドバイザー。舞踊評論家として、各種の新聞、雑誌に寄稿するほか、文化庁などの各種委員会の委員を歴任、数多くの舞踊賞の選考委員、舞踊コンクールの審査員を務める。